

4. 報告事項 (1) 霧ヶ峰におけるフランスギクの分布調査について

大窪久美子・辻 琴音 (信州大学農学部)

1. 目的：霧ヶ峰高原には中部日本を代表する半自然草原が分布するが、1970 年代以降は外来植物の侵入、定着が顕著となり、在来植物や在来生態系への影響が懸念されている。一方、近年ではキク科外来植物のフランスギク (*Leucanthemum vulgare*) の分布拡大がみられるが、十分な知見がない。そこで本研究では、フランスギクの分布や群落構造等を明らかにし、群落の特性や立地環境条件との関係を把握することを目的とした。
2. 方法：分布調査ではキク科外来植物であるフランスギク及びヒメジョオン類等の 8 種に対して踏査を行い、線的分布を把握した。ビーナスラインを含む車道および遊歩道、登山道の総距離 42 km を対象とし、出現地点を GPS レシーバーで記録した。次に、フランスギクの面的な分布を把握するために、50m×50m メッシュを 593 箇所設け、優占度階級により評価した。また、群落特性を明らかにするために本種の優占群落を対象として、植生及び立地環境調査を実施した。
3. 結果考察：フランスギクは現時点での登山道・遊歩道への侵入は少ないが、車道の総延長の 5 割以上で分布した。これは道路工事による土壌のかく乱や種子の持ち込み、また周辺観光地の栽培個体が逸出したおそれと考えられた。また、フランスギクは相対光量子密度が高く、オープンな立地環境を中心に分布が拡大し、群落が成立したと考えられた。今後、遊歩道・登山道上においても、踏みつけによる裸地化に伴い、光環境が明るくなれば、フランスギクがさらに草原に侵入するおそれがあると考えられた。群落

型では本種はヘラバヒメジョオン (Es) 型で最も優占した。本群落を中心として、駆除や在来群落に復元させることが今後の課題として考えられた。なお、本研究の一部は伊那谷財団の研究助成により実施したものであり、ここに感謝の意を表す。



図 フランスギクの線的分布状況